

平成30年度

市ヶ谷台慰霊祭 祭文

明治維新から150年という節目の年を迎えた本日、帝國陸軍ゆかりの地である市ヶ谷台において、平成30年度市ヶ谷台慰霊祭を執り行うにあたり、ご参列の皆様を代表して、謹んで祭文を奏上いたします。

明治以降の数次に亘る戦争に際しては、明治7年「ここ市ヶ谷台に設置された陸軍士官学校を卒業された多くの陸軍将校の方々が、祖国と同胞の安寧を願ひ、北は酷暑不毛の地、南は酷暑瘴癘の地に赴き、陸にまた空におい



て、勇敢敢闘して散華されました。その数は約8千余柱に及びます。愛する家族を故国に残して異国の地で敢然と散つて逝かれた方々の「国を護る志」と一家の柱を失い後に残されたご遺族の方々の深い悲しみに思いを致すとき、今なお万感胸に迫るものがあります。

ここ市ヶ谷台に祀られた御英霊は、先の大戦において、終戦の責任を一身に負われ、伝統ある我が国の将来にわたる国体の護持と繁栄を希ひ、自決された陸軍大臣阿南大将、第一総軍司令官杉山元帥、同軍付吉本大将、大本營作戦参謀晴氣少佐、そして特別攻撃隊あるいは空中戦で赫赫たる戦果を挙げた散華された全陸軍航空部隊の勇士の御英霊であります。その無念さを感じる悲痛の念に堪えません。

また、ここ市ヶ谷台には、国家ために任務の完遂に務め、志半ばにして、その職に殉じられ1964名の自衛隊殉職者が祀られていることを我々は決して忘れることがあつてはなりません。このようなかけがえのない方々を失つたことは、ご遺族はもとより、国家にとつて誠に大きな痛手であり、悲しみに堪えないところであります。

今日、我が国民が享受している平和と繁栄は、明治から現在に至るまでの間、国家存亡の危機に際して尊い一

命を捧げられた多くの陸軍将校の方々と、同じ国を護る志を持つて我が国の存立を担う崇高な職務に殉ぜられた自衛隊殉職者の方々の無私の献身により築かれた礎の上にあると言つても過言ではありません。改めて、御霊（みたま）への限らない尊崇と感謝の誠を捧げますとともに、安らかなご冥福をお祈り申し上げる次第であります。

市ヶ谷台慰霊祭は、故瀬島龍三市ヶ谷台慰霊会会長のご尽力で毎年挙行され、平成18年度からは、公益財団法人偕行社が主催してまいりました。明治以来陸軍の魂の故郷であつたこの市ヶ谷台は、言わば戦前から戦後にわたる諸霊鎮魂のメモリアルゾーンであり、その市ヶ谷台で陸軍将校の戦没者と自衛隊殉職者の方々の御霊を慰霊することは、皆様が残された伝統を顕彰することでもあり、誠に意義深いものがあります。私共は、「国を護る志」の大切さをしっかりと、後世に受継いでいかなければならないと、決意を新たにするものであります。

天皇皇后両陛下におかれましては、即位以来戦没者の慰霊には格別の御心を寄せられ、御高齡を押し、国内外に亘つて慰霊の旅を続けておられます。来年4月末の退位が間近になるなか、去る3月には、先の大戦での激戦地であつた沖繩県を慰霊訪問され、国

立沖繩戦没者墓苑において、戦没者の尊い御霊に對して、日本の国と国民を代表して感謝と追悼の誠を捧げられました。この天皇陛下の戦没者の慰霊に對する強い思召しにそうよう、私共は、思いを新たにし、尊い一命を日本の国家・国民のために捧げられた陸軍将校の戦没者と自衛隊殉職者の方々を末永く慰霊・顕彰するとともに、皆様の日本を愛してやまなかつた弛まぬ努力と切なる想いを、いついつまでも語り継いでまいります。

先の大戦が終結してから長い歲月が流れ、今や戦後生まれの世代が国民の主力を占めるようになり、平和と繁栄に慣れるうちに、戦没者等に対する敬意と慰霊の心が薄れつつあることが憂慮されるとともに、公のために尽くす責任感の希薄化と国民道義の頹廢が懸念されます。私共は、先人から託されたこの誇り高い日本が、「日本らしさ」、「日本人らしさ」を取り戻し、本来の日本に再興されることに今後とも努力を続けていくことをお誓ひ申し上げ、御霊のご加護を切にお願い申し上げますとともに、日本国の安寧と弥栄を念じつつこの記念すべき日の慰霊の言葉といたします。

平成30年11月6日

公益財団法人偕行社

理事長 森 勉